

李玉の伝奇と明清小説

——『風雲会』の周辺——

氏 岡 真 士

一 戯曲史における李玉

李玉（一六一一—一六七七）⁽¹⁾は明末清初の伝奇作家である。

青木正児『支那近世戯曲史』（『青木正児全集』第三卷、春秋社、一九七二年）は呉梅の説を援用し、李玉を玉茗堂派に位置付けている。しかし今日では、李玉を湯顯祖と切り離し、蘇州派の代表と見做すのが一般的であろう。

蘇州派は、才子佳人の枠組みを破って現実的な題材を取り上げた点に一つの大きな特色があるとされる。⁽²⁾

その様な見地から重要な李玉の作品は、まず『清忠譜』、次に『一捧雪』であると思われる。⁽³⁾『清忠譜』は、清官の周順昌や男だての顔佩章らが、いかに魏忠賢の専横に反発し、殺され、やがて名誉を回復されたかを描いている。また『一捧雪』は、お坊っちゃん莫懷古が家宝の玉杯「一捧雪」を、敵嵩の息子敵世蕃に奪われ命も狙われるが、周囲の協力で生き延び玉杯も取り戻す話である、いずれも李玉とおよそ同時代の事件に取材しており、当時の実情を反映した内容と見做されている。⁽⁴⁾

どちらの作品でも、庶民が重要な役回りを果たしている。『清忠譜』では蘇州の住民である顔佩章らが、周順昌の逮捕を阻止する為に騒ぎを起し（第十・十一折）、仲間が捕まれば自分も逃げず

（第十三折）、従容として死に赴く（第十八折）。『一捧雪』でも、莫懷古の味方の中には戚繼光の様な大物もいるけれど、より大きな働きをするのは、莫懷古を諫め（第九齣）、一捧雪をうまく隠し（第十一齣）、遂には身代わりとなって首を差し出す（第十四・十五齣）下男の莫誠であり、或いは莫懷古を裏切った湯勤に結婚を迫られ（第十八齣）、これを刺殺して自害する（第二十齣）第二夫人の雪艷である。敵役の湯勤も、元はしがたい表装師に過ぎない（第一齣）。この点に着目して、蘇州派の進歩性をどの程度認めるかも議論されてきた。⁽⁵⁾

二 『麒麟閣』と『隋史遺文』・『説唐全伝』（一）

以上の様な理解によれば、李玉に対する研究は純粋な戯曲史の問題である。

だが最近、それが小説史にも密接に関わることが示唆された。すなわち小松謙「隋唐をめぐる講史小説の展開について」と千田大介「李玉の歴史故事伝奇と乾隆期英雄伝奇小説」『麒麟閣』と興唐故事小説とを中心に（いずれも『中国古典小説研究』第一号、一九九五年）は、李玉の『麒麟閣』伝奇と隋唐もの歴史小説との関係を考察している。

『麒麟閣』は、およそ以下のような内容である。⁽⁶⁾なおテキストに

生・且など役柄は記されない代わりに、目録に役者の名を注記している。

△第一本上巻▽（以下、第一出を①の様に表す）

- ① 玉帝は星々に、紫微が下凡し唐の天子になるので將軍として補佐するよう命じる。
- ② （開場のことば）
- ③ 秦叔宝が樊建威と犯人護送の旅に出るので、尤俊達は送別の宴を開く。そこへ程咬金が訪れ、程は尤の所に身を寄せる。
- ④ 楊広は太子となり、それに反対した李淵を、魏文通の計に従い襲うことにする。
- ⑤ 秦叔宝は楊広に襲われた李淵を救う。李淵は単雄信の兄を誤って射殺する。
- ⑥ 単雄信は李淵の謝罪をひとまず受け入れ、徐茂公は単を慰める。
- ⑦ 宿代が払えなくなった秦叔宝は、素性を隠して単雄信に愛馬を売る。
- ⑧ 秦叔宝は病に倒れ徐茂公に介抱され、事情を知った単雄信の下で養生する。
- ⑨ 秦叔宝を氣遣う母寧氏と妻張氏の所へ、尤俊達の言い付けで程咬金が訪ねて来る。樊建威が帰って来て、寧氏の頼みで秦の様子を見に行く。
- ⑩ 単雄信と別れた秦叔宝は張奇の宿に泊まるが、追刺ぎと間違われて張奇を殺す。
- ⑪ 潞州刺史蔡清は秦叔宝を死刑に擬す。護送役人の童環は単雄信に知らせる。
- ⑫ 単雄信は童環の入れ知恵で、広域軍政官の袁天罡に陳情する

ことにする。

⑬ 袁天罡は秦叔宝の弟と名乗った単雄信の嘘を見破るが、義氣に免じて秦叔宝を地方送りで済ます。

⑭ 秦叔宝は童環に連れられ幽州へ行くことになる。単雄信は幽州総管羅藝の敵しさを語り、徐茂公らは羅の腹心の張公謹へ紹介状を書く。

⑮ 張公謹は擂台で武芸の挑戦者を持つ史大奈の様子を見に行く。秦叔宝と童環は宿がどこも満員で、擂台が設けられていると知る。

⑯ 秦叔宝は史大奈を破る。張公謹は所用があるので秦叔宝のことを留守役の薛彪に託す。

⑰ 薛彪は尉遲南・尉遲北や杜環と相談し、羅夫人の誕生日のどさくさに紛れて秦叔宝の件の報告を済まそうと考える。

⑱ 羅藝は夢のお告げもあって、秦叔宝が夫人の甥だと気付き、一同喜ぶ。

△第一本下巻▽（以下、通算第何出かをカッコ内に記す）

① (19) 秦叔宝の望郷の念を知った羅成は、父の羅藝に帰らせるよう勧める。去るに当たり秦と羅成は武芸を教え合うが、羅成は父の言いつけに従い全ては教えない。

② (20) 秦叔宝は羅藝一家に別れを告げる。

③ (21) 秦叔宝は母と妻の所へ戻る。

④ (22) 秦叔宝の母の誕生祝いに各地から豪傑が集まる。程咬金は尤俊達と図って柴紹を襲い単雄信らと戦いかけるが、仲間とわかって仲良く賣家楼へ向かう。

⑤ (23) 秦叔宝の母の誕生祝いが行なわれ、豪傑たちは揃って義兄弟となる。

- ⑥(24) 秦叔宝は楊越公に誕生祝いを届けるため長安へ出張するよう命ぜられる。羅成と程咬金・尤俊達・齊國遠は、元宵節の灯籠見物をすべく秦に同行する。
- ⑦(25) 秦叔宝は楊越公の客分たる李靖から灯籠見物を止められ、危機回避の策も与えられる。
- ⑧(26) 王婉児という娘が灯籠見物の最中、高官の息子宇文成徳にさらわれる。母の陸氏から事情を聞いた羅成らは、ためらわず秦叔宝と共に宇文の屋敷に乗り込む。
- ⑨(27) 秦叔宝らは宇文成徳を殺す。羅成は王婉児を救い陸氏共々逃がす。秦叔宝らは李靖の別宅へ逃げ込む。
- ⑩(28) 秦叔宝らは李靖の手引きで長安を脱出し、魏公の李密に投じようと考える。
- ⑪(29) 皇叔の楊林は、秦叔宝の評判を聞いて十三太保に取り立て、美女張紫煙も与える。十二太保の賀芳はそれが面白くない。
- ⑫(30) 程咬金と尤俊達は楊林の荷物を襲って捕まり、殺されそうになる。秦叔宝は濟州へ送って取り調べるべきだと主張し、受け入れられる。
- ⑬(31) 李密や王伯当・羅士信が山東で反乱し瓦崗寨に集結した、と聞いた賀芳は、秦叔宝も一味と睨む。
- ⑭(32) 張紫煙は秦叔宝に、賀芳が楊林へ讒言したと伝え、脱出の手引きをしてから自刃する。
- ⑮(33) 秦叔宝は追っ手の上官儀や賀芳を破り、更に楊林と戦っていると、程咬金が助けに来る。
- △第二本上巻▽
- ①(34) 魏徴と徐茂公の提案で、将帥字旗を拜んで起てた程咬金が瓦崗寨の主となる。

- ②(35) 李密は瓦崗寨に使いを出し、秦叔宝ら五虎将の力を借りて、楊林が東方旺に立てさせた百尺銅旗を抜き倒そうとする。
- ③(36) 李密の手紙を見た程咬金は、秦叔宝を派遣する。
- ④(37) 楊林から救援要請が届き、羅成は羅成を派遣する。
- ⑤(38) 羅成は東方旺から敵は秦叔宝と聞き、秦が百尺銅旗を倒すのを秘かに手伝い、東方旺も殺して秦に合流する。
- ⑥(39) 楊林から事情を知らされた羅成は、仮病で羅成を呼び寄せ打ち首にしようとするが、夫人に嘆願されて高樓に上げ射殺と決める。
- ⑦(40) 王婉児と陸氏は羅成を慕って幽州を訪ね、羅の危機を知る。楊林の援軍に向かう沙陀國の靖遊飛は、婉児らから事情を聞き、羅成を助けると約束する。
- ⑧(41) 王婉児は羅成の所に忍び込み、羅は母(羅夫人)に婉児を託す。いよいよ処刑という時に靖遊飛が乱入し、羅は逃げ渡り飛も楊州へ向かう。
- ⑨(42) 楊林は大赦と武科挙開催で豪傑たちを一網打尽にしようと考え、靖遊飛に閔所を任せる。
- ⑩(43) 李世民と李元霸は羅成から大赦と武科挙のことを聞く。李靖は畏だと止めるが羅成と李元霸は敢えて赴き、世民と靖も後を追う。
- ⑪(44) 宇文化及は豪傑たちの中に大砲を打ち込もうとするが、大雨で大砲が使えなくなり、楊林が来るのを待つ。
- ⑫(45) 羅成や程咬金が腕前を披露した後、秦叔宝は楊林の部下を殺してしまい、怒った楊林は槍の試合を挑む。羅成は秦を助けて楊林を刺し殺す。
- ⑬(46) 羅成は靖遊飛を情で動かし閔所を開かせ、豪傑たちは脱出

に成功する。

△第二本下巻▽

- ① (47) 尉遲恭は天書と鋼鞭を得て、妻を残し劉武周に投じる。道中酔っ払って、金龍池の中に住む烏錐馬を乗りこなす。
- ② (48) 六丁神は老人に化け、尉遲恭に武具一式を送る。
- ③ (49) 劉武周は妹を李元吉に狙われ反乱したのだった。劉に夢のお告げがあり、果たして尉遲恭が麾下に加わる。
- ④ (50) 劉武周は出兵し雁門関に迫る。
- ⑤ (51) 尉遲恭は雁門関の罟を逆用して破り、劉武周は知略で柏壁関・寧武関を落す。
- ⑥ (52) 李元吉は三関が破れたと知り長安へ逃げる。
- ⑦ (53) 尉遲恭は八寨の将を悉く倒す。
- ⑧ (54) 秦叔宝の妻張氏は永福寺で、李淵の娘で柴紹の妻の李氏に保護される。
- ⑨ (55) 尉遲恭は界休県に迫る。
- ⑩ (56) 李世民の部下は全て尉遲恭に敗れる。徐茂公は秦叔宝を迎えに洛陽へ向かう。
- ⑪ (57) 徐茂公の誘いに秦叔宝と程咬金は応ずるが、単雄信は兄の仇として拒む。
- ⑫ (58) 秦叔宝は尉遲恭を破り、劉武周も敗れる。
- ⑬ (59) 李世民は単雄信に襲われるが、尉遲恭に救われる。
- ⑭ (60) 李氏（柴夫人）は瓦崗寨から秦叔宝の母を呼び、張氏と再会させる。
- ⑮ (61) 秦叔宝は爵位を受け、母や妻と喜び合う。

以上、第二本になると羅成や尉遲恭の活躍も描かれるが、全体を通しての主人公は秦叔宝と考えて問題あるまい。

すると『麒麟閣』は秦叔宝の活躍に紙幅を割く点で、隋唐もの歴史小説の中でも、『隋史遺文』⁹⁾や『隋唐演義』¹⁰⁾・『説唐全伝』¹¹⁾といった作品と軌を一にすることになる。もっとも『隋史遺文』や『隋唐演義』の場合、『麒麟閣』第一本下巻の第十一出以降とは具体的な共通点が殆ど見出だせない。しかし『説唐全伝』の場合はそれ以降とも一定の相関性が認められること、小松論文や千田論文がすでに指摘している。

これは『説唐全伝』が乾隆四十八年（一七八三）刊本より遡れない以上、『麒麟閣』を参照して編集されたと考えれば辻褄は合う。しかし簡単にそうとも言い切れない。なぜなら『説唐全伝』の成立年代はもっと遡るのではないかという疑義が、鄭振鐸や柳存仁から既に呈されている上、小松論文は隋唐もの歴史小説諸本の相互関係を細かく跡付けた上で、それが『隋史遺文』（崇禎六年（一六三三）刊本）より先行する可能性を指摘しているからである。なお『隋唐演義』（康熙三十四年（一六九五）刊本）は、関連部分が基本的に『隋史遺文』¹²⁾に拠っている¹³⁾ので、ひとまず副次的に考慮すれば良からう。

小松論文の考え方の大筋は、まず明末の『隋史遺文』には「旧本」があったが、その内容は『説唐全伝』に見える。次に『説唐全伝』は『隋史遺文』に比べて、『麒麟閣』とあらずじが遙かに似ている。それは『麒麟閣』や『説唐全伝』には「旧本」『隋史遺文』の内容が保存されているからであろう、というものである。

『説唐全伝』に『隋史遺文』の「旧本」の内容が見えるとはどういうことか。小松論文は四つほど例を挙げているので、若干のコメントを加えつつ紹介しよう。

まず『隋史遺文』第三回の「総評」に

舊本有太子自扮盜魁、阻劫唐公、爲唐公所識。小説亦無不可。予以爲如此罅隙、歇後十三年君臣何以爲面目？故更之。

とあり、『旧本』では即位前の隋煬帝（↑太子）が自ら李淵（↑唐公）を殺そうとしておられたという話だが、不合理なので改めたと言っている。ところが『説唐全伝』第三回の対応する場面はまさに隋煬帝が自ら李淵を襲撃している。「但し、ばれてはいない。」

次に『隋史遺文』第二十三回・『隋唐演義』第十八回・『説唐全伝』第十三回の対応する場面には共通して

對子報道「夏國公竇爺府中家將、有社火參見。」

という記述が見える。『隋史遺文』や『隋唐演義』では「夏國公竇爺」なる名前は初登場で、誰のことかわからない。だが『説唐全伝』は第二回の羅藝が降伏するくだりで既に

不一時、夏國公竇建德入城。羅藝忙擺香案、竇建德開讀詔曰……。

とあり、竇建德を指すとわかる。ところで竇建德がこの場面で「夏國公」として登場するのは明らかに史実と異なる。「旧唐書」巻五十四・『新唐書』巻八十五参照。『隋史遺文』はそれを嫌って「旧本」から削ったが、『説唐全伝』には残されたのであろう。

三つめに『隋史遺文』第三十五回「総評」には、

按史……徐世勣亦年十六七作賊。原本以爲與魏玄成俱在隋爲官、因隋主弒逆棄職、似非少年矣。且于念九回中插入做『水滸』公孫勝打晁天王管門人、光景相合、厭其套、也去之、于此插入。

とあり、「原本」で徐茂公（↑徐世勣）が魏徵（↑魏玄成）ともども隋の暴虐を見て官職を棄てたとあるのは史実の彼が十代で反乱者になった「旧唐書」巻六十七、「新唐書」巻九十三」と合わない（ので改めた）、と言っている。だが『説唐全伝』第五回には

「魏徵」因見奸臣當道、與知巢徐茂公、也是范陽人氏、掛冠閑行、從師徐洪客、在此東嶽廟住。那徐茂公深知陰陽・過去未來……。

つまり魏徵と徐茂公は奸臣の専横を見て辞職し、徐洪客なる人物に弟子入りした、という記述がある。

もっとも、『水滸伝』の公孫勝が晁蓋の門番たちを殴る話（容與堂本第十五回）を模倣したと言う場面は、『説唐全伝』には無い代わりに、『隋唐演義』の第二十四回に徐洪客が単雄信の部下たちを殴る形で見える。これは徐茂公と徐洪客の混同に起因する。恐らく「旧本」では、徐茂公が魏徵と共に登場した際、単雄信の部下を殴りもしていたのであろう。『隋史遺文』は、この部分については第九回で

「魏徵」後遇了一箇同道的黃冠、姓徐、名洪客、與他意氣相投……。

と記し、徐茂公を徐洪客と改める一方、徐茂公は第三十五回に至って初めて、若者として登場させた。『隋唐演義』は「隋史遺文」を襲って徐洪客の登場は第十回、徐茂公の登場は第三十七回だが「旧本」を生かそうとして、単雄信の部下を殴った人物を徐洪客に改め、第二十四回に挿入した。そして『説唐全伝』は「隋史遺文」の影響も受けた為、「殴る話は消えたが」第五回で徐茂公と徐洪客双方の名が出るのであろう。「この部分の論証は難解であり、筆者の誤解があるかも知れない。なお『隋史遺文』第三十五回総評の「念九回」は普通の「廿九回」つまり第二十九回を指す可能性もある。ちなみに『説唐全伝』では、これに対応する第二十四回で徐茂公が二度目の登場となる。」

四つめに、やはり『隋史遺文』第三十五回の総評に

按史、歴城羅士信、與叔室同郷、年十四、與叔室同事張須陀、同建奇功。後士信歸唐爲總督、死節。亦一奇士也。原本無之、故爲補出。

とある。つまり、羅士信は史実では若い頃から秦叔宝と共に活躍したので、『旧唐書』卷一百八十七上、『新唐書』卷二百九十一、『隋史遺文』も(第三十五回以降)その事を補ったが、『原本』には登場しない、と言うのである。『説唐全伝』でも羅士信は全く登場せず、代わりに羅成なる人物が「第七回以降」やはり秦叔宝と共に活躍している。

羅成は『隋史遺文』では、第十四回で『説唐全伝』と同様に羅藝の息子として登場するが、以降はあまり活躍せず、第五十五回でひょっこり顔を出す程度である。ここで興味深いのは『大唐秦王詞話』第三十六回に、羅成の字が士信とされている事である。恐らく羅士信は伝承の過程で、士信は字、諱は成という事にされ、やがて士信の名は忘れられた。一方で彼は羅藝「『旧唐書』卷五十六・『新唐書』卷九十二に見える実在の人物」の息子であるなどと虚構の話が膨らみ、『旧本』に収められたが、『隋史遺文』は羅成の虚構を嫌って極力削ったと考えられる。「第五十五回の総評には、『原本李藝後不得見、茲爲補入、既入李藝、則諸人又不得不補矣。』とある。『李藝』は羅藝が李姓を賜ったものであり、補われた「諸人」には当然羅成も含まれよう。『又た補わざるを得ず』という言い方からは、羅成に触れなくなかった気持ちを読み取れるが、これも小松論文の主張を裏付けるであろう。」これを証するのは『麒麟閣』が、前半は『隋史遺文』・『説唐全伝』の双方と類似するのに、後半は『説唐全伝』に似た虚構色の強い展開を示す点である。

以上に紹介した小松論文の博引旁証には傾聴すべき点が多いが、

全面的に従うには不安も残る。節を改めて検討しよう。

三 『麒麟閣』と『隋史遺文』・『説唐全伝』(2)

小松論文は要するに、『隋史遺文』の『旧本』の荒唐無稽や杜撰を、今本『隋史遺文』は合理化したが、『説唐全伝』は受け継いだ、と解釈するのである。これは挙例された部分について言えば恐らくそうであろう。だが他の部分ではどうか。

たとえば『説唐全伝』第八回の、秦叔宝が一本の矢で二羽のワシを射抜く話には

要曉得叔寶的箭、乃是正伯當所傳、原有百步穿楊之巧。若據小說上羅成暗助一箭、非惟并無此事、抑且豈有此理？

とある。つまり秦叔宝は元々弓が上手く、けて小説が描く様に羅成が陰から矢を放って二羽のワシを射抜いたのではないと言っているのである。この口吻は何か先行の作品を意識している筈だが、『隋史遺文』第十五・十六回や『隋唐演義』第十四回は、まさに『羅成暗助一箭』を描いている。のみならず『隋史遺文』第十五回には『原評』として

公子(即羅成)暗助一弩、則又成其奇者。

とあるから、『隋史遺文』の『旧本』も『説唐全伝』の言う小説と同じだったとわかる。すなわち少なくともこの部分については、『説唐全伝』は明らかに後出なのである。ちなみに『麒麟閣』には、対応する部分は見られない。

また『隋史遺文』第三十四回の総評には、

此節原有『開河記』、近復暢言於『艷史』。……此却把狄去邪一節、叙入去邪與叔寶言談、陶榔兒一節、敷衍作事、宋襄公一段、

叔謀衆人語言中點出……。

とあるのだが、ここから窺われる「旧本」の内容も『説唐全伝』には保存されていない。

『開河記』¹⁴は文言短篇小説で、隋煬帝の運河開鑿に伴う数々のエピソードを責任者たる開河都護の麻叔謀の悪逆ぶりを軸に描く。『隋史遺文』総評によれば、「旧本」はこれをそのまま収めていた事になる。『艶史』は『隋煬帝艶史』¹⁵を指し、その第十七〜二十五・十四・二十七・二十八回は、『開河記』を基本的に襲いながら多くの枝葉を加えている。そして現在の『隋史遺文』第三十四回は、『開河記』から狄去邪・陶榔兒・宋襄公のエピソードだけを抜き出して、総評が言う様な改編を加えている。つまり秦叔宝が開鑿に参加したことにして、彼とこれらのエピソードを結びつけているのである。

『説唐全伝』は第三十三〜三十四回で煬帝の運河開鑿を取り上げる。秦叔宝は登場しないが、『開河記』を襲っている訳でもない。すなわち開鑿工事が地中の龍を傷つけ、その龍が暴れたお陰で運河は出来たが、以来各地で反乱が起こる様になった、という話を描くだけである。なお『麒麟閣』にも対応する部分は無い。

ところで『説唐全伝』第四十六回には

這名爲「美良川三鞭換兩鎧」、尉遲恭打他三鞭、叔寶只換得他二鎧。那小説上却說、三鞭換兩鎧是打背心的。叔寶二鎧重一百八十斤、尉遲恭的鞭重八十一斤、……身体乃精血所成、豈有此理？

とある。尉遲恭の鞭に秦叔宝が鎧で応え、三度目には秦叔宝が攻撃に転ずる前に尉遲恭は逃げた、それが「三鞭換兩鎧」だと言っている。そして小説が背中を叩いたとするのは、両雄の獲物の破壊力か

ら考えておかしい、と疑問を呈している。すると先程の、秦叔宝の弓の話の場合と同様、ここでも『説唐全伝』は小説を改めていることになる。

この場合、『隋史遺文』には関連する記述が見られない。第五十五回の総評にも

箇中敬徳之事稍略、以本傳所重在叔寶、不可多及耳。

と記すのみである。「三鞭換兩鎧」に関連する最古の記述は、『元刊雜劇三十種』¹⁶の「尉遲恭三奪槊」における

【牧羊関】當日我知胡敬徳兩箇初相見、正在美良川厮撞着……我不付能卒々地兩箇「鎧」才彪去、它搜々地三鞭却還報了。

つまり秦叔宝がかるうじて鎧を二度振るう間に、尉遲恭（↑胡敬徳）は鞭を三度返してきた、という部分であろう。「三鞭換兩鎧」の内容は作品によって異なるが、『説唐全伝』の言う小説にもっとも近いのは『隋唐兩朝史伝』¹⁸第五十四回であろうか。そこには秦叔宝が鎧で背中を二度叩いたら尉遲恭は血を吐いて逃げ、次に尉遲恭が背中を鞭で三度叩いたら、秦叔宝は血を吐きそうになって飲み込んだという話が見える。もっとも

叔寶曰「……四箇「鎧」約有二百萬之力、三鞭還有二百四十斤之重、汝尚缺百四十斤的氣力、何足爲奇？」

とあるから、両手の鎧で二度叩いたから四箇「鎧」なのは良いとして、二鎧は百斤の計算になるので『説唐全伝』よりかなり軽い。鞭はわずか一斤の差だが。

『麒麟閣』第二本下巻第十二出「較雄」の場合は

△尉▽我打你三鞭、你打我兩箇「鎧」、閃一閃就算他輸、不爲好漢了。……△尉遲打秦瓊三下▽……△秦瓊打尉二下、尉喊敗下。……▽

と見える。尉遲恭が秦叔宝を鞭で三度叩き、次に秦叔宝が尉遲恭を鎧で二度叩いたら、尉遲恭は叫び声を上げて逃げたとあるから、これも『説唐全伝』が言う小説に近い。ただし『麒麟閣』は武器の目方も背中を叩いたとも書いていない。

ここで、小説が何を指すかはさておき、注意しておきたいのは、最初に掲げた弓の話でもそうだが、『説唐全伝』も先行作品に一定の合理化を施す部分が存在する点である。もちろん出鱈目な話も多いが、だから全面的に古い、とまでは言えないであらう。

千田論文の場合、『説唐全伝』と『隋史遺文』の『旧本』との一定の符合を認めつつも、『説唐全伝』の文章が簡略で評註も無く、記述の混乱がある点から、『説唐』の前半部が『遺文』を承けているとしている。次に『麒麟閣』と『説唐全伝』の共通点を三つの角度から指摘し、『説唐』のうち、唐王朝成立前史を描く部分の核心となるエピソードの形成は、明末まで遡るとする。そして『麒麟閣』と『隋史遺文』にも共通性が見られる事から、『麒麟閣』は『説唐』の原型となる物語に基づき、『遺文』を参照して製作された⁽²¹⁾と考えている。

だが簡略な文章や記述の混乱だけで、『説唐全伝』の『前半部』がすべて『隋史遺文』を承けたと言えるだろうか。また仮に『説唐全伝』と『旧本』に全く関係が無いのなら、『麒麟閣』は『隋史遺文』（『旧本』を含む）を利用してつづ創作されたのだと考えれば、『説唐』の原型となる物語は想定せずに済みそうだが、その辺りも明瞭さを欠く。

勿論これらの疑問を以て、やはり『説唐全伝』は後出であり、『麒麟閣』を利用したに過ぎない、と決め付けるのも拙速である。恐らく各作品とも現行テキストは新旧の要素が混在しているのであつて、

その具体相は今後、更に追究し弁別する必要があるだろう。『麒麟閣』が『説唐全伝』の種本だとしても、それはそれで小説史にとって意義深い。

四 『風雲会』と『南宋志伝』・『飛龍全伝』

さて李玉の伝奇と小説史との関わりは、『麒麟閣』に限られるのであろうか。

これについて千田論文は、『麒麟閣』と『説唐』との物語内容上の関係は、他の李玉の歴史故事伝奇と乾隆期英雄伝奇小説との関係にも、敷衍し得る可能性が高い。⁽²²⁾と述べている。他の作品とは、

『牛頭山』伝奇と『説岳全伝』

『風雲会』伝奇と『飛龍全伝』

『昊天塔』伝奇と現在の楊家将もの伝統演劇・芸能

である。そして『牛頭山』伝奇と『説岳全伝』との関係については、千田大介「岳飛故事の変遷をめぐって―鎮魂物語から英雄物語へ―」（『中国文学研究』第二十三期、一九九七年）の中でも検討が為されている。⁽²³⁾

ところで『風雲会』伝奇と『飛龍全伝』との関係について、筆者は両者を異質な作品と断じたことがある。⁽²⁴⁾ここでその詳細を論じた

い。

『風雲会』は、鄭恩を生が、趙京娘を旦が演じ、およそ以下の内容である。⁽²⁵⁾

△上巻▽（以下、第一出を①の様に表示す）

① （開場のことば）

② 鄭恩は早くに両親を亡くした上、北岳恒山で病氣になつて不

- 遇を嘆く。
- ③ 鄭恩は苗訓に占って貰うが、凶相と言われ苗訓を殴る。
- ④ 趙京娘一家は蒲州に住む。兄の趙普が受験で上京するのを見送る際、龍竹が生えているのに気付いて、父の趙信は龍笛を作り北岳へ納めようと考えた。
- ⑤ 鄭恩は、擂台で過去二年負け知らずの淳于勝の大言牌を壊す。
- ⑥ 北岳大帝の祭りの日、鄭恩は淳于勝を擂台で破る。
- ⑦ 龍笛を献じた趙信はその場で居眠りし、夢の中で鄭恩が骨格を変えられ、聖帝と並んで宴会を楽しむのを目撃する。
- ⑧ 陳搏は西岳華山で長い間の深い眠りから覚め、流れ星を見て真の天子の出現を知り下山する。
- ⑨ 蒲州を訪れた鄭恩は、たまたま趙信の軒先で雨宿りをする。かつての夢から鄭恩の出世を信じる趙信は、鄭恩と京娘を婚約させる。
- ⑩ 鄭恩は上京して鉄胎弓を売るが、誰も引き絞れない。趙匡胤はこれを引き取り、鄭恩を十人目の義兄弟とする。
- ⑪ 趙匡胤と鄭恩は陳搏に占って貰い、帝王と功臣の相だと言われる。
- ⑫ 趙匡胤と鄭恩は御勾欄で大雪・小雪の歌舞を見るが祝儀を出さず、管理者で蘇逢吉の息子の蘇省文を殴って逃げる。
- ⑬ 指名手配された趙匡胤は、御勾欄の人々を皆殺しにするが、韓素梅だけは助ける。趙匡胤の母に頼まれた張光遠は趙匡胤が関西に逃亡するのを手伝い、趙匡胤は韓素梅を鄭恩に託して去る。
- ⑭ 介山寨の追剥ぎ、張広児と周進は、美しい娘を連れて旅人の列に狙いをつける。
- △下巻▽（上巻・下巻と目録は記すが、本文には無く、餉数も通算されている。）
- ⑮ 趙京娘は父母と共に北岳へお礼参りに向かう途中、張広児と周進にさらわれる。
- ⑯ 趙匡胤は逃亡先の太原青牛觀で、監禁された趙京娘を救出し、義兄妹となる。
- ⑰ 趙匡胤は張広児と周進を倒し、趙京娘を無事に父母の下へ送り届けて去る。
- ⑱ 鄭恩は韓素梅を連れて薊州へ逃れ、董達・韓通・猩々怪の三覇がいると聞く。
- ⑲ 鄭恩は崑崙山へ薪取りに来て、猩々怪を倒し、捉えられていた韓通の母を助ける。
- ⑳ 韓通は鄭恩の所にお礼に来るが、韓素梅に魅せられて連れ去る。鄭恩は韓通を殺し、韓素梅を尼寺に預けて、趙匡胤を探しに行く。
- ㉑ 趙匡胤は、郭雀児の世となってほとぼりも冷めたので、柴柴から貰った布を絳州へ売りに行く。道中で董達一味が通行料をよこせと言うので喧嘩になるが、それを鄭恩が見付けて加勢し、董達らは敗れる。
- ㉒ 趙普は即位した柴柴（後周世宗）の命を受けて趙匡胤を探す途中、苗訓と宿屋で知り合う。そこに趙匡胤と鄭恩も泊りに来る。苗訓は鄭恩の骨格が変わっているのに驚く。趙匡胤と鄭恩・趙普は互いが趙京娘に縁ある同士と知って喜ぶ。
- ㉓ 趙匡胤は総司令官として南唐に出兵することになり、鄭恩は三本の矢を連射して全体的を射抜いて先鋒に選ばれる。
- ㉔ 趙京娘と母は、趙普や鄭恩・趙匡胤の出世を知って喜ぶ。

②⑤ 趙匡胤は後周世宗の死後、鄭恩や趙普らに推されて天子（宋太祖）となる。

②⑥ 趙京娘と韓素梅は、都へ向かう途上で巡り合い、互いの縁の深さを知る。

②⑦ 宋太祖・鄭恩らは陳搏と苗訓が都を辞すのを見送る。

これは鄭恩と趙京娘の幸福な結婚への道程がモチーフであると考えられる。だからこそ鄭恩が生、趙京娘が且によって演じられ、趙匡胤は浄に過ぎないのであろう。

これに対して『飛龍全伝』³⁰は、趙匡胤が皇帝に成り上がる過程がモチーフである。鄭恩は彼の義弟として活躍し出世もするけれど、その内容は『風雲会』とは殆ど関係が無いし、全く別のプロセスを経て陶三春という女傑と結婚する（第四十〜四十二回）。趙京娘は鄭恩とは一面識も無く、また趙匡胤に救われるのは同じだが、のちに自殺している（第十八〜二十回）。趙普は第三十八回以降しばしば登場するが、京娘一家とは縁もゆかりも無い。異質な作品と断ずる所以である。

さて『風雲会』伝奇は『飛龍全伝』に影響を与えているだろうか。まず確認しておきたいのは、『飛龍全伝』は明の『南宋志伝』の改作であり、『南宋志伝』から巨大な影響を受けている点である。『南宋志伝』は五代後晋から趙匡胤の即位・南唐制圧までを、主に『五代史平話』によって編年史書風に辿りつつも、趙匡胤の出世物語に一定の紙幅を割いた作品であり、前者を削り後者を補ったのが『飛龍全伝』だと考えられる。³¹

その上で、たとえば『飛龍全伝』が趙匡胤を赤須龍の降凡としたり（第六回など）、鄭恩が棗の樹を引き抜いて董達と戦う点（第八回）、それぞれ『風雲会』第七齣や第二十一齣の影響を受けてい

る可能性がある。『南宋志伝』の趙匡胤は金龍の姿を現わし（第十三回、なお『打董達』雜劇頭折も同じ）、鄭恩が董達と戦う時の獲物は特に記されていない（第十六回、なお『打董達』第三折では「棍」）。

しかし逆に言えば、その程度の影響に過ぎない。『飛龍全伝』の前半四分の三は『南宋志伝』に大幅な改変を施し、それ以降も改変部分は多々あるが、殆どは『風雲会』と無縁の内容である。

なお『飛龍全伝』を『南宋志伝』と比較した場合、全体に鄭恩を活躍させ柴栄（後周世宗。文学上は趙匡胤・鄭恩の義兄とされる）を貶めている。これは『風雲会』伝奇が鄭恩を主役とする一方で、柴栄は一度も直接登場させない点（第二十一〜二十五齣参照）を想起せなくも無いが、質的変化と量的変化を同一方向上に捉えるのも詭弁の恐れがある。

ところで前節まで『麒麟閣』伝奇と先行する『隋史遺文』、『旧本』との関係を論じたが、『風雲会』伝奇と先行する『南宋志伝』の場合はどうだろうか。

残念ながら関係は薄いと言わざるを得ない。それは趙京娘が全く登場せず、鄭恩の結婚も描かれず、寂しく潞州で戦没する（第四十五回）点に端的に表れている。

『南宋志伝』第十二〜十五回に見える、趙匡胤の十人の義兄弟や南唐が献上した妓女の大雪・小雪という名前にしても、前者は『風雲会』伝奇と具体的な顔ぶれが異なるし、後者は共通するとはいえず、それだけで関係を云々するのは強引である。

もちろん第十〜十三齣が、『南宋志伝』第十二〜十五回と無関係だとは言わない。だから部分的には『南宋志伝』を利用していると考えるのは良いし、むしろ自然であろう（なお注(4)参照）。しかし

モチーフを趙匡胤と鄭恩の出世、と単純化するにしても、それは次節で紹介する諸作品からもわかる様に『南宋志伝』の専売特許ではない。だから『風雲会』伝奇に対する『南宋志伝』の影響は過大評価はできない。

要するに、史実の趙匡胤から彼を描く清代英雄伝奇小説へ至る発展過程において、『風雲会』は傍流に過ぎないのである。この点に照らせば、李玉の歴史もの伝奇と英雄伝奇小説との間に密接な関係があるという捉え方は、必ずしも成り立たない。

五 『風雲会』の素材

前節に述べたことは、けして李玉の伝奇と小説史との関係が薄いという意味ではない。まずは『風雲会』伝奇が、どんな素材から成り立っているかを考えてみよう。

『風雲会』という題名からまず想起されるのは、羅貫中『宋太祖龍虎風雲会』雑劇であろう。⁽³²⁾ この雑劇は、正末は趙匡胤であり、およそ以下の内容である。⁽³³⁾

△第一折▽後周世宗の命を受けた石守信は、王全斌の意見に従い、趙匡胤を將軍に迎えるべく潘美に探させる。趙匡胤と義弟の鄭恩は苗訓に、帝王と諸侯の相だと占われる。それを潘美が見付け、趙匡胤は石守信に会って抱負を語る。義弟の趙普もお祝いに来る。

△第二折▽後周世宗の死後、趙匡胤は鄭恩や趙普らに推されて天子（宋太祖）となる。だが四方に控える呉越・南唐・後蜀・南漢の諸国は、これに抵抗する決意を固めていた。

△第三折▽天下統一の方法を考えて眠れない宋太祖は、吹雪の夜

に丞相趙普を訪ねて策を乞い、その場で諸將に命令を下す。近衛隊長の鄭恩も駆け付ける。

△第四折▽都を守る趙普や鄭恩・苗訓は、諸將の戦勝報告を受け、諸国王の降伏を聞き入れて、龍虎風雲会が実現したと喜ぶ。

この雑劇を母体にして伝奇が作られたとは考えにくい。鄭恩は度々顔を出すが大した働きをしない。ただ第二折と伝奇の第二十五齣の間には、明白な継承関係が認められる。すなわち第二十五齣に見える曲牌は【一枝花】・【牧羊関】・【哭皇天】・【烏夜啼】・【殺尾】の五曲であり、いずれも趙匡胤によって歌われるが、これらは雑劇第二折の【南呂一枝花】・【隔別】・【哭皇天】・【烏夜啼】・【尾】と字句がほぼ完全に一致している。⁽³⁵⁾ もちろん内容も相似である。だがこの部分と題名以外は関係が薄い。

曲牌の一致に着目するなら、馬致遠『西華山陳搏高臥』雑劇⁽³⁶⁾も『風雲会』伝奇に若干の素材を提供していることがわかる。正末は陳搏であり、およそ以下の内容である。

△第一折▽趙匡胤と義弟の鄭恩は、陳搏に未来の帝王と諸侯の相だと占われ、酒屋で一杯ふるまう。

△第二折▽趙匡胤は天子（宋太祖）となった後、党継恩を派遣して陳搏を迎えさせ、陳搏は不承々々従う。

△第三折▽宋太祖は陳搏に希夷先生の号を与え、更に高官に取り立てようとするが、陳搏は嫌がる。

△第四折▽鄭恩は陳搏を酒色で誘惑し、そのまま一晩閉じ込めるが、陳搏が「秉燭待旦」で動じないのを見て、宋太祖に諦めるよう言う約束する。

これも『風雲会』伝奇とは別の話である。しかし雑劇第一折と伝奇の第十一齣に限れば、内容のみならず、陳搏の歌う【仙呂】点絳

春【・混江龍】・【油葫蘆】・【後庭花】・【金盞兒】・【醉中天】・【金盞兒】・【殺尾】の各曲牌についてまで、細部に至る一致が見られるのである。なお両者の結末も、何か関係があるかもしれない。

それでは、この他の趙匡胤に関わる雑劇はどうかと言えば、現存するものとしては無名氏『趙匡胤打董達』雑劇と無名氏『穆陵閣上打韓通』雑劇⁽³⁸⁾が考えられるが、どちらも『風雲会』伝奇との関係は薄そうである。

まず『打董達』雑劇だが、正末は趙匡胤であり、およそ以下の内容である。

△頭折▽趙匡胤と鄭恩は旅先で傘売りの柴栄と義兄弟になる。

△第二折▽董達の手下の単潮虎と歪蹄虎は、勝手に橋を渡った柴栄に難癖を付けるが、逆に趙匡胤と鄭恩に痛め付けられる。

△第三折▽董達は仕返しに柴栄の傘を全て奪うが、趙匡胤に撲殺される。

△第四折▽董太公と単潮虎・歪蹄虎は寝込みを襲うが、それぞれ鄭恩・趙匡胤・柴栄に撲殺される。

△第五折▽柴栄のおじの郭(彦)威によって、三人は將軍に取り立てられる。

董達は『南宋志伝』や『飛龍全伝』にも登場し(それぞれ第十五〜十六回、第七〜十回)、趙匡胤の敵役として有名である。或いは董遵誨がモデルかも知れない(『宋史』巻二百七十三、『風雲会』雑劇第一折参照)。さて彼にまつわる話は、雑劇と二小説ではいずれも柴栄が傘売りとして登場し、趙匡胤や鄭恩と義兄弟になる点で継承性が窺われる。ところが『風雲会』伝奇においては(第二十一齣)、前述の様に柴栄は登場せず、趙匡胤が布売りとして登場するから、相対的に関連性が低く、曲牌が一致する部分も無い。

次に『打韓通』雑劇だが、趙匡胤を正末とし、およそ以下の内容である。

△頭折▽趙匡胤は李忠の妻の趙氏の義弟となり、鄭恩と共に病気の彼女の為に洪吉寺へ薬を取りに行く。

△第二折▽趙匡胤の親戚の趙思は酒屋だが、韓通の手下の石洪らが金を払わず、息子の趙景中に怪我までさせた。そこで趙匡胤と鄭恩は石洪らを痛め付ける。

△楔子▽趙匡胤はいとこである洪吉寺の普恵から薬を受け取り、韓通の評判を聞く。

△第三折▽韓通は石洪の仕返しに趙匡胤の馬を奪うが、戦って三連敗し降参する。

△第四折▽趙氏の病氣は治り、趙匡胤らは天子の恩賞に与る。

韓通は柴栄に仕え、趙匡胤の即位に反対して殺された実在の人物であり(『宋史』巻四百八十四)、『南宋志伝』や『飛龍全伝』では全編にわたって度々登場する。趙匡胤の最大のライバルと言っても良からう。雑劇第三折の馬を奪う話も、『南宋志伝』・『飛龍全伝』とも第二十九回に類話が見える。ところが『風雲会』伝奇では、彼が奪うのは馬ではなくて韓素梅であり、彼を倒すのは鄭恩一人であり趙匡胤は無関係である(第二十齣)。やはり関連性は低く、曲牌も対応関係が認められない。

こうして見ると、李玉は『風雲会』伝奇を編むに当たって、『南宋志伝』や諸雑劇を参照はしているにせよ、自らの構想に都合の良い部分だけを断片的に取り込んでいるのが窺えよう。

では肝心のヒロイン京娘はどこから来たのか。

これは勿体ぶるまでも無く、「趙太祖千里送京娘」(『警世通言』第二十一卷⁽³⁹⁾)であろう。あらずじは以下の通り。

趙匡胤は太原で、追剥ぎの張広児と周進に幽閉されていた京娘を救い出し、蒲州の実家まで送ることにする。そこで彼女を馬に乗せ、自分は徒歩で千里の道程を行く。途中で京娘を取り戻しに来た張広児らを退治し、我が身を捧げて感謝しようとする京娘を叱り付け、無事に蒲州に辿り着く。ところが京娘の父が二人の仲を疑い結婚させようとするので、趙匡胤は怒って去り、京娘はこれを恥じて自害する。

この内容は『風雲会』伝奇第十六・十七齣と基本的に対応する。また字句の一致も見られる。たとえば趙匡胤の以下のセリフである。

公子笑道「漢末三國時、關雲長獨行千里、五關斬大将、護着兩位皇嫂、直到古城、與劉皇叔相會、這才是大丈夫所爲。今日一位小娘子救不得、還要做甚麼人？倘然冤家狹路窄、教他雙雙受死。」
〔趙太祖千里送京娘〕

△浄▽漢末三國之時、關雲長獨行千里、五關斬將、護着二位皇嫂、直至古城、與劉皇叔相會、這才是大丈夫所爲。今日一位小娘子救不得、還要做甚麼人？倘然冤家路窄、教他雙雙受死。

〔『風雲会』第十六齣〕

したがって『風雲会』伝奇が「趙太祖千里送京娘」を参照したのは明らかだが、にもかかわらず、両者には重大な相違が見られる。すなわち京娘の運命である。『趙太祖千里送京娘』の京娘は自害してしまうが、『風雲会』伝奇では既述の通り、そんなことは無い。これもまた、李玉が素材を自分の構想に都合良く改めた例と言えよう。なお京娘なる名は先行作品にもしばしば見えるが恐らく趙匡胤とは関係なく、「趙太祖千里送京娘」は馮夢龍が関羽の「千里独行」の話にヒントを得て書き下ろした作品であろうことはかつて論じたので、ここでは繰り返さない。⁴⁰⁾

では李玉はなぜ、京娘を自害させず、鄭恩と結婚し夫が出世するという幸福な結末を迎える様に改めたのか。それは直接的には、鄭恩という主人公の設定に関わるであろう。

鄭恩は架空の人物である。雜劇や『南宋志伝』では趙匡胤の義弟として活躍するが、配偶者がいたとは書いていない。つまり本来、京娘とは縁もゆかりも無かった。

『風雲会』伝奇でも、既に述べた様に二親無く病気の身で登場している。その彼の運が開けるきっかけは何だったかを思い出せば、それに伴い必然的に一つの先行作品が想起されよう。それは「趙太祖千里送京娘」と同じく三言〔古今小説〕Ⅱ「喻世明言」・「警世通言」・「醒世恒言」に収められる、「史弘肇龍虎君臣会」〔古今小説〕第十五卷⁴¹⁾である。あらずじは以下の通り。

鄭州の閻招亮は東岳の炳靈公に呼び付けられ、蘄州より奉納された龍笛材を笛に仕上げた。その際、一人の男が肝や心臓を銅や鉄に換えられ出世を約束されているのを目撃する。また妹の閻越英が早く妓女から足を洗えるよう炳靈公に頼む。ところが全ては夢だった。雪の日に通り掛かった史弘肇を、閻招亮は夢に出てきた男と信じて度々酒をおごる。金の無い史弘肇は泥棒をして閻越英の妓楼に逃げ込むが、閻越英にはその姿が白い虎に見えたので、兄の勧めもあって史弘肇を婿に取る。やがて義兄の郭威が、構欄の妓女を殺したと行って転がり込んで来る。

郭威が史弘肇と犬鍋を売っていると、かつて後唐明宗の大奥にいた柴夫人が、郭威の運氣を見込んで嫁入りして来る。郭威は夫人の紹介で河南の符令公に投じ、李朝遇や尚衛内を破って男を上げ、汴京の劉知遠の牙将に取り立てられる。劉知遠が太原節度使に転ずる道中、史弘肇が投じて来てやはり牙将になり、

郭威と共に劉知遠の後漢建國に活躍して出世した。

前半は史弘肇、後半は郭威に重点を置いて、彼らの成り上がり物語を語っている。この構成は、『風雲会』伝奇が鄭恩から説き起こし、次第に趙匡胤についても詳しく、出世の過程を描くのと軌を一にする。のみならず史弘肇と閻越英の馴れ初めは、鄭恩と京娘の場合（第二〇九齣）と同じ趣向である。すなわち女の肉親が龍笛を獻じ、そこで見込んだ男と再会して縁談を進めている。そして二作品ともそれを機に、男の運が開けていく。

史弘肇は実在の人物であり、郭威と共に劉知遠に仕えて活躍した男であるが、妻は閻氏で昔は妓女であった（『旧五代史』卷一百七、『新五代史』卷三十）。そして彼の物語は金元明を通じて広く語られていたことが記録に残っている。一方の鄭恩は架空の人物であり、これまで紹介した諸作品で趙匡胤の義弟として、登場はするが、いずれも家族については何も触れていない。

恐らく李玉は史弘肇の設定を鄭恩に当てはめ、主人公としたのである。すると必然的に閻越英に代わる女性が必要になるが、話を更に膨らませるに足るエピソードを有し、しかも独身の京娘はお誂え向きの存在だった。かくて鄭恩と京娘のロマンスが誕生したのである。要するに『風雲会』伝奇は、「史弘肇龍虎君臣会」を直接のモチーフとした上で、前述の諸作品やその他の素材を組み合わせて仕上げたという推定が可能である。

その際、重要な役割を果たすのはヒロイン京娘を描く「趙太祖千里送京娘」であって、これは「史弘肇龍虎君臣会」と同じく三言に収められた作品である。すると『風雲会』は『麒麟閣』とは別の形で、小説史と密接に関わっている事になる。

六 李玉の伝奇と三言

『風雲会』に関連して注意すべきは、歴史もの伝奇に限定しなければ、李玉の伝奇で三言を素材とするものは他にも幾つかある点である。それ自体は周知の事実と思われるので、各齣の概要は示さず、なるべく簡潔に検証したい。

まず想起されるのは、いわゆる「一人永占」のうち二つ、『人獸関』と『占花魁』であろう。

『人獸関』は恩人の息子施還の困窮を救わなかった桂新が、自分も親戚に裏切られた挙げ句、夢で地獄に落ち、犬に変えられた家族を見て改心する話。「桂員外途窮懺悔」(『警世通言』第二十五卷)を全面的に踏襲している。ただし一連の事件を観音の思し召ししたり(第一齣)、郷紳の支徳を高官の于徳に変えたり(第二齣)、エピソードの順序を動かしたりと(第十六〜二十四齣)、細部の改変は枚挙に暇なく、それによって話の展開は三言より単純明快である。そして桂新の娘桂貞奴が良心的だった(第十四・二十齣)、施還の母が死ななかつたりと(第二十一齣)、三言よりも救いの多い内容になっている。

『占花魁』は油売りの秦種がこつこつと金を貯めて、王美娘(莘瑶琴の源氏名)という花魁の一夜の客となるが、彼女が酔い潰れていたのを介抱だけして帰った、のちに感激した花魁は自ら身請けして油売りに嫁ぐという話。「売油郎独占花魁」(『醒世恒言』第三卷)の内容を基本的に受け継いでいる。ただし『人獸関』より改変の度は甚だしい。すなわち莘瑶琴と秦種の父親を、食糧店主と世捨て人から高官と將軍に改め、かつ花魁の両親は早く亡くなり、宦官の

叔父や親代わりの沈仰橋・蘇翠兒夫婦がいると改めている(第一・二齣)。したがって三言とは、身内との再会という副次的なモチーフは具体相がかなり異なる。すなわち第一〜四・十・十一・十三・十五〜十七・十九・二十一・二十七・二十八齣は伝奇独自の話であり、逆に三言における朱十老・蘭花・邢権・金中こと莘善・秦良の話は殆ど残っていない。しかし主たるモチーフに変化は無いし、第二齣で莘瑤琴の詠む詩や第九齣の莘瑤琴と劉四の対話・第十八齣や第二十齣の秦種「三言では秦重」と王九媽の対話などの字句の酷似からも、三言に基づくことは確かめられる。

さて『占花魁』よりも改変の度合が甚だしいのは『太平銭』である。爪を育てる見すほらしい張老が、白い驢馬を捕まえたのが縁で高官韋恕の娘に求婚し、巨額の支度金を難なく用意して結婚してしまふのだが、実は張老は仙人で、後に韋恕一家は娘の兄韋固を除き昇仙したという話。この伝奇は、「張古老種瓜娶文女」(『古今小説』第三十三卷)に基づくであろう。『続玄怪録』の「張老」(『太平廣記』卷第十六)に依ると見る向きもあり、それは伝奇が同じく『続玄怪録』の「定婚店」(『太平廣記』卷第一百五十九)に見える韋固のエピソードを取り込んでいるからだろうが(第六・八・二十六齣)、この説は成り立たない。張老が娘を見初める導入部や韋恕一家が兄「三言では韋義方」以外昇仙する結末は『続玄怪録』には無く、三言独自のものだからである。さて『太平銭』は、韋固の結婚に伴う出世をも描くことで、三言の妹を取り返そうとして老人を襲ったので彼だけが仙人になれなかったという血気盛んを戒めるモチーフとは一線を画し、皇帝に仕える身で仙人にはなれないというエクスキューズを与えている(第二十七齣)。なお「定婚店」は有名な月下老人の話で、例えば明の劉兌『月下老定世配偶』雜劇(佚)。

残曲は趙景深『元人雜劇鈎沈』上海古典文学出版社、一九五六年に見える)などにも描かれていたと考えられるので、『太平銭』が「定婚店」を直接利用したかどうかは断定しにくい。

しかし『風雲会』との関係で最も興味深いのは『眉山秀』であろう。⁽⁵⁰⁾ 秦観が蘇小妹と結婚し、さらに長沙の妓女文娟を第二夫人に迎えるまでを、蘇軾や王安石のエピソードを交えて描いたものだが、この伝奇には三言から取材したと考えられる部分が幾つも見える。すなわち第一〜六齣は「蘇小妹三難新郎」(『醒世恒言』第十一卷)、第九・十一齣は「王安石三難蘇学士」(『警世通言』第三卷)、第(二十・二十一・二十三齣は「拗相公飲恨半山堂」(『警世通言』第四卷)、第(十四・十七・二十六齣は「明悟禪師赶五戒」(『古今小説』第三十卷)の筋を襲うなり趣向を借りるなりしている。その上で、文娟については『夷堅志』補卷第二所収の「義倡伝」を利用しつつ(別に「長沙妓女」にも基づくと言われるが未見)、一別のもの秦観は没し長沙の妓女も棺にすがって死ぬという悲劇的な結末を、ハッピーエンドに改めている。ちなみに『貶黃州』・『赤壁賦』・『東坡夢』といった雜劇との関係は薄い。また三言の諸作品は以前の筆記小説などに取材しているが、伝奇がそちらに基づくと考えるべき材料も見当らない。

『眉山秀』伝奇は、主に三言から複数の素材を組み合わせる点で、文武の隔たりを越えて『風雲会』伝奇と共通する。そして素材に比べ幸福な結末を用意する点は、伝奇の常套と言ってしまうはそれまじくする(なお『眉山秀』の蘇軾は「明悟禪師赶五戒」と違って、中央復帰までで出番を終える。前述した『人獸閔』での桂貞奴や施還の母の扱いと同様、悲劇性を薄める配慮だろう)。

以上の様に、李玉の伝奇はしばしば三言に取材している。それは李玉と馮夢龍との交遊からすれば、むしろ自然なことでもあろうが（吳新雷「李玉交遊統考」、注(2)前掲書）、ともあれ李玉の伝奇と明清小説の関わりは、英雄伝奇と歴史長編小説との間に限定はできない。その様な限定は、研究を事実と乖離した方向へ導いてしまいうであらう。

もちろん李玉の伝奇は他にもあり、その素材も多岐に渉るのであって、本稿ではその一端に触れたに過ぎない。ただしこの一端、つまり『風雲会』伝奇の素材とそれに関連する諸伝奇の素材の問題は、第二節で取り上げた小松・千田両論文の先駆的意義を損なうことなく研究を進める為には、重要な一端の筈である。

注

- (1) 欧陽代発「李玉成卒年考弁」(『文学遺産』一九八二年第一期)の説による。
- (2) 吳新雷『中国戯曲史論』(江蘇教育出版社、一九九六年)に収められた「李玉生平、交遊、作品考」など一連の論考は、その代表格と言えよう。
- (3) たとえば蘇寧『李玉和《清忠譜》』(中華書局、一九八〇年)は、李玉の作品を『清忠譜』とその他に二分し、顔長珂・周伝家『李玉評伝』(中国戯劇出版社、一九八五年)は、李玉の作品紹介に当たって『一捧雪』を取り上げる。また管見によれば李玉の伝奇で排印されたのはこの二作に限られる。『清忠譜』は三種(中山大學中文系五級明清伝奇校勘小組校勘、中華書局、一九五九年。張清華校注、中州書画社、一九八二年。王毅校注、人民文学出版社、一九九〇年)、『一捧雪』は一種(欧陽代発校注、上海古籍出版社、

一九八九年)ある。

- (4) 作品内容の背景について、『清忠譜』は注(3)前掲の王毅校注本が詳しい。『一捧雪』は康保成『《一捧雪》本事與所謂“一捧雪玉杯”辯』(『文獻』一九八八年第二期)が比較的まとまっている。
- (5) テキストは『古本戯曲叢刊』三集(文学古籍刊行社、一九五七年)の影印本と、注(3)前掲の排印本による。
- (6) 『李玉評伝』(注(3)前掲)には、莫誠が「弟観此人……」云々と諫めた、という指摘があるが、これは方毅庵の言葉だから誤読である。第三齣参照。
- (7) たとえば馮沅君「怎樣看待《一捧雪》」(『文学評論』一九六四年第五期)。
- (8) 『古本戯曲叢刊』三集の影印本による。
- (9) 『明清善本小说叢刊』第十一輯(天一出版社、一九八五年)所収の影印本および二つの排印本(人民文学出版社・北京大学出版社、いずれも一九八九年)による。
- (10) 『古本小説集成』(上海古籍出版社、一九九二年)所収の影印本と広東人民出版社一九八一年排印本による。
- (11) 『古本小説集成』所収の影印本と中州古籍出版社一九八九年排印本による。
- (12) 鄭振鐸「中国小説提要」(『中国文学研究』上、作家出版社、一九五七年)、柳存仁「倫敦所見中国小説書目提要」(書目文献出版社、一九八二年)。
- (13) 欧陽健「《隋唐演義》綴集成帙考」(『文獻』一九八八年第二期)。
- (14) 『唐宋伝奇集』(『魯迅全集』第十卷、人民文学出版社、一九七三年)による。
- (15) 『明清善本小说叢刊』所収の影印本と群益堂(長江文芸出版社)一九八五年排印本による。
- (16) 『古本戯曲叢刊』四集(商務印書館、一九五八年)。徐沁君『新

- 注(42)で論ずるが、ただ『曲海総目提要』に従うとしても、鄭恩が活躍の末に京娘と結婚するモチーフは変わらない。
- (30) 中国戯劇出版社一九九一年排印本と『明清善本小説叢刊』・『古本小説集成』所収影印本による。なお注(24)前掲論文参照。
- (31) 注(24)に同じ。『南宋志伝』のテキストは『対訳中国歴史小説選集』(ゆまに書房、一九八三年)・『古本小説叢刊』(中華書局、一九九一年)影印の世徳堂本である。世徳堂本は三台館本(『明清善本小説叢刊』所収)と相補う部分があるが、畢竟細かな字句の異同に過ぎず、本稿の論旨には影響しない。
- (32) 無名氏『魏徵改詔風雲会』(脈望館抄本)は魏徵が李密の詔を書き換えて李世民を救う隋唐もので、鄭恩や趙匡胤とは無関係である。き換えて李世民を救う隋唐もので、鄭恩や趙匡胤とは無関係である。
- (33) 脈望館校(『古名家』)本による。他に顧曲齋本・息機子本・『陽春奏』本・『醉江集』本と四つの刊本があり(いずれも『古本戯曲叢刊』四集所収)、折をどこで分けるかなど細かな違いはあるが、内容は同じと考えて良い。なお脈望館校本の書き込みの主については孫楷第『也是園古今雜劇考』五「編類」(上雅出版社、一九五三年)参照。
- (34) この三文字はパリ本では脱落しており、北京本によって補う。
- (35) ただ【牧羊関】と【殺尾】については、伝奇は雜劇からかなり省略している。
- (36) 『元曲選』(中華書局一九七九年排印本)による。他に元刊本や脈望館校(『古名家』)本・息機子本・『陽春奏』本などの刊本があるが(いずれも『古本戯曲叢刊』四集所収。他に李開先本もあるらしいが未見)、曲牌一致箇所について字句がもともと伝奇に近いのは『元曲選』本である。
- (37) 原文は趙玄朗とする。ちなみに『五代史平話』の「周史平話」下巻(十b、顯德三年二月)では趙匡胤の父の名とする。
- (38) どちらも脈望館抄本(『古本戯曲叢刊』四集所収)。
- (39) 人民文学出版社一九八七年排印本と世界書局一九八三(?)年影印本による。
- (40) 氏岡真士「赤い顔の天子」(『しにか』九月号、一九九七年)および訂正(『しにか』十月号、一九九七年)参照。なお嚴敦易「京娘盜果」(『元劇斟疑』中華書局、一九六〇年)も、京娘(或いは普通の荆娘)が趙匡胤とは必ずしも結びつかない事を論じている。
- (41) 人民文学出版社一九八四年排印本と上海古籍出版社一九八七年影印本による。
- (42) 『曲海総目提要』(注(29)前掲)ではこの話は全体の中間に位置し、また鄭恩が京娘の下に来たとき龍笛を持っていたので趙信は彼を見込んだことになっており、些か性質が異なる。次節でも述べる様に三言の影響が重視されるので、『曲海総目提要』の話は現行テキストより後の改作と断じられよう。
- (43) 胡士瑩『話本小説概論』(中華書局、一九八〇年)二二一〜二二二頁参照。
- (44) たとえば第五・六齣の挿台の話は『水滸伝』の燕青や隋唐ものの秦叔宝の話あるいは『劉千病打独角牛』雜劇などに、また第二十三齣は『三国演義』の銅雀台のくだりや『南宋志伝』第三十回などに類例が見られる。
- (45) 『曲海総目提要』以来多くの指摘がある。ただし鶴呑みに出来ないことは、たとえは『風雲会』の素材として『残唐五代史演義』や『北宋志伝』の名が無造作に挙げられがちな点から伺えよう。
- (46) 残りは冒頭で述べた『一捧雪』と、もう一つは『永固円』である。いずれも『古本戯曲叢刊』三集による。
- (47) 人民文学出版社一九八七年排印本と世界書局一九八三年影印本による。
- (48) その一部は洪皓の故事や『西湖遊覧志』に依ると言われる。
- (49) 『古本戯曲叢刊』三集による。
- (50) 『古本戯曲叢刊』三集による。

Ming and Qing Novels and Li Yu's (李玉) Plays
— Particularly on the Feng-yun Hui (風雲会) —

Masashi UJIOKA

Li Yu was a playwright of the late Ming and the early Qing. He is regarded as a leader of the Suzhou school (蘇州派). Recently it was pointed out that his play of Qi-lin Ge (麒麟閣) is closely connected with the Sui-shi Yi-wen (隋史遺文) and the Shuo-Tang Quan-zhuan (說唐全伝). Someone says this relationship is applied to other Ming and Qing historical novels and Li Yu's plays both of which are epic.

The author indicates that the Feng-yun Hui does not go back to the Nan-Song Zhi-zhuan (南宋志伝), the Fei-long Quan-zhuan (飛龍全伝) is not based on the Feng-yun Hui, although they are epic, and that the Feng-yun Hui uses some novels in the San-yan (三言). We know the San-yan is also the source of the Mei-shan Xiu (眉山秀) and some other Li Yu's plays, and these plays and novels are lyric. It is clear that the connection between Ming and Qing novels and Li Yu's plays is not as simple as someone says.